

テーブルディスカッション

テーマ3 生活者の視点で 子どものカリエス治療を考える



田中こども歯科医院 田中 克明

略 歴

1993年 九州大学歯学部卒業
1993～1995年 九州大学附属病院小児歯科勤務 研修医
1995～2004年 おおの小児矯正歯科（下関市）勤務
2004年 佐賀県鳥栖市にて開業

子どもの歯科管理の目標、すなわち小児歯科臨床の目標は、「健全な永久歯咬合の育成」です。私たち小児歯科医にとって、乳歯列期から子ども達とかかわり、そのときそのときの口腔内の健康管理を行いつつ、そして成長終了時に健全な永久歯咬合へ育むことが、かかりつけ医としての役目、責任であろうと考えます。そのためには長期にわたる定期的管理（ながいお付き合い）が必要と考えますが、最初の子ども達との出会いのきっかけの多くが、“カリエス”であることが多いと思います。

当院における初診時の主訴は、予防が主訴の場合も含めると、74%がカリエスに関係する要望です（治療32%、予防42%）。ですから、カリエスの対応が、子ども達、保護者の期待にきちんと応えられること、それが自院を信頼して頂けることにつながり、その後の長いお付き合いが始まるためにも重要と考えます。

一般歯科から転医されてくる子ども達をみていると、近年の歯科界を取り巻く環境悪化の中、医院経営が優先しての対応なのか、子どもを泣かせないことを最優先し、数ヶ月通院しているのに、治療してくれない、終わらないなどと不満を持たれている保護者が多く見られます。中には、中途半端な治療を行ったために、反って新たな問題を引き起こし、将来の永久歯咬合の育成に重篤な影響へ発展しているケースもときにみられます。

さらに、社会の状況は、経済情勢から共働き世帯の増加やシングルマザーが増加したことにより母親が仕事をされている場合がほとんどです。あるいは子ども達の習い事へ熱心すぎる家庭等々、歯科医院への複数回の通院が困難な場合が多いようです。保護者の価値観、生活の多様化、育児情報の氾濫などに伴い、臨床現場では様々な要求に応える必要に迫られます。個々の状況に応じた歯科管理が必要であるように思います。

しかしながら、大学の小児歯科の医局等では、子ども達のカリエスの減少に伴い、若い先生方の経験が不足し技術の未習熟も懸念され、こうした複雑な臨床現場での対応も不安視されていると聞きます。

このようなことから、子ども達との出会いであるカリエスの対応を、もう一度見つめ直し、長期の定期的管理、健全な永久歯咬合の育成へとつなげて行くことを皆さんと考えたいと思います。